

授業者、遠隔システムの状況

鹿嶋市立鹿島小学校（配信校）

専門人材 石塚 有美 先生（英語科教諭）
荒原 亜沙美 先生（英語科講師）



高度な専門性をもつ人材。
本市、本事業3年目。

今年度より事業に参加。
主に個別指導を担当。



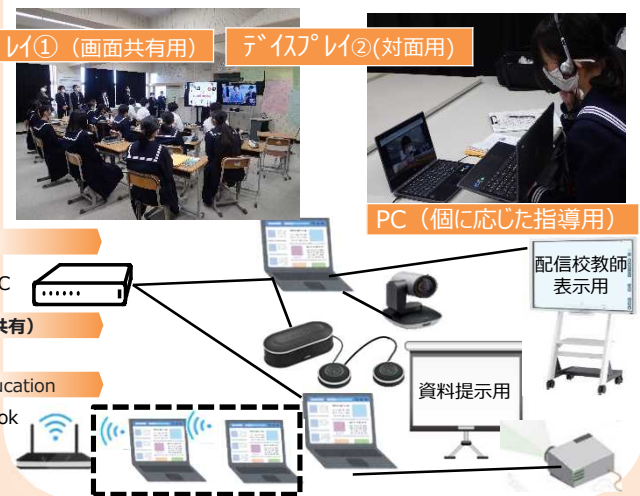
鹿嶋市立鹿野中学校第2学年（受信校）

A組14名、B組16名

アドバンスクラス

額賀 翔太 先生（保健体育科講師）

遠隔教育特例校制度の活用



- ①端末の校内Wi-Fiへのアクセス制限
- ②ユニット型電子黒板を活用するためのアプリの選定

- ①校内Wi-Fiにアクセスできない端末をLTE接続
- ②Microsoft OneNoteの活用

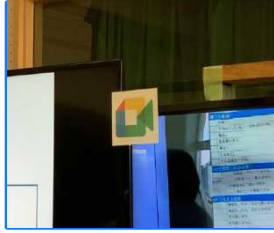
授業の計画 中学校第2学年 英語 Unit 5 Universal Design

時	学習内容	形態		遠隔システムの授業における工夫や課題、解決策 (1人1台端末の利活用も含む)
		対面	遠隔	
1	外国人にコンビニおにぎりの開け方を教える。		○	<ul style="list-style-type: none"> ○ 昨年度より、アドバンスクラスの人数が6名増えたため、集音マイクを4台から6台に増やし、生徒一人一人の声を拾いやすくなった。 ○ 1人1台端末のChrome bookを使って、課題を各自の端末に送信、提示し、課題を把握させることができた。 ○ 授業者がMicrosoft OneNoteで作成した資料をZoom回線を使ってスムーズに生徒に提示し、共有することができた。 ○ メインのZoom回線とは別にMeet回線を使用し、英語を苦手としている生徒に1人1台端末を使用して、個別指導をすることができた。 ※ 前単元において、オーストラリア、ブリスベンの中学校と鹿野中学校をZoomでつなぎ、日本の習慣やマナーについてスライドを使って発表を行った。双方向のやりとりをしながら本物の英語にリアルタイムで触れることができた。
2	Universal Designについて理解を深める。		○	
3-4	教科書本文の要点をつかみ、身近にあるUniversal Designについて伝え合う。		○	
5-6	ALTが日本の生活を満喫できるように、ALTからの日本に関する質問について答える。		○	
7	作成したスライドを用いて相互に発表練習を行い、内容について吟味する。		○	
8	ALTの日本に関する質問に答える形式で、スライドを使って発表する。	○		

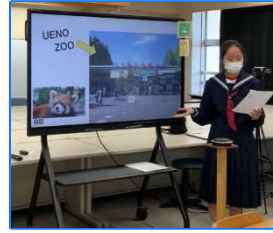
活動の様子



Meet回線を使用した個別指導



情報活用能力を育てる一環として、使用するソフトウェアのアイコンを表示する



授業者にリハーサルを見せ指導を受ける

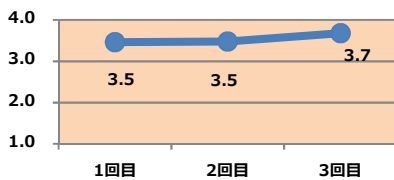


配信側教室の様子

アンケート結果

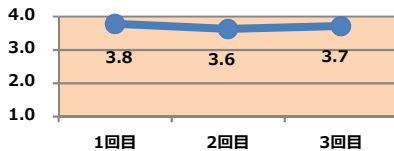
生徒

1. 配信側の画面に映る資料等の文字の大きさ、図などは見やすかったか。(4.0が最高)



生徒の振り返り
 ・対面の時とあまり違いがなかった。
 ・図や資料などを有効活用して対面授業の時と同じようにわかりやすかった。

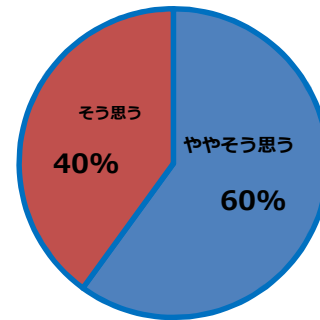
5. 考えたり、話し合ったりしながら、自分の考えを広げたり深めたりすることができたか。(4.0が最高)



生徒の振り返り
 ・わからないことがあっても友達と解決することができた。
 ・クラスメイトの中で話す時間が増えた。

教員

5. 児童生徒一人一人の学習の状況を把握し、習熟の程度に応じて指導できたか。



・配信側では机間指導ができないので、プリント等を使用する場合、ひとりひとりの学習状況を把握するのは難しい。そのため必要に応じChromebookをMeet回線につなぎ個別指導の場面にに対応できる環境を確保している。

アンケートや全体を通しての考察

成果

- Chromebookを使用して、英語が苦手な生徒とMeetで繋ぎ、個別指導を行った。最初の頃に比べて、英語授業への意欲が高まり、英語力の向上が見られ、生徒が自信をもち取り組めるようになってきた。
- 3年間の遠隔授業を通じて毎年共通していたのは、授業者が教室にいないので、困ったときは生徒同士で助け合い、自然に協働的な学びになっている場面が多く見られたことである。
- オンライン授業に慣れてきたので、大きな違和感なく授業が進められている。オンライン授業ならではの受講態度（リアクションをする、質問をする等）が浸透してきた。

課題と対応案

- 遠隔授業の場合、特にSmall Talkでは生徒一人一人の発言を拾うことが難しかった。
 → ① 集音マイクを4台から6台に増設した。
 ② 生徒がどのような英語を話しているのかを把握するためには、中間指導の場面で振り返りが必要。
- 探究的な学習のICTの活用場面では、グループやペアの対話の中で、課題に対する発表内容の妥当性等についての吟味が十分ではなかった。
 → 何をどんな目的で伝えるのかの目標に立ち返り、発表内容を協働で吟味し、目標達成を意識しながら発表につなげる。